

久慈市立長内中学校3年 小倉 環

平穏な日常に暗雲が立ち込めたのは、私が小学校四年生の春である。父の背骨に密かに巣食っていた悪性の腫瘍は、突然父から下半身の自由を奪ってしまった。とても稀な症例で、診断された時にはすでに手遅れだったらしい。入院した岩手医大での数度にわたった辛い抗癌剤治療に区切りをつけ、父は残された時間を家族と共に過ごすことを強く望んだ。

こうして、五年生の冬から父の在宅介護が始まった。仕事をしていた母に代わって日中父のお世話をお願いしたのは、介護のヘルパーさんや訪問看護師さん、そしてデイサービス施設の方々だった。勿論、病院の主治医や看護師さん達も折れそうな父と母の心を何度も支えて下さったという。

二年に及んだ父との最後の日々は、家族にとって何にも代えがたい大切な思い出になった。病気に向き合った父の生き様を誇りに思うと共に、父の闘病生活に関わって下さったさまざまな職業の方々の存在を知った。

そんな私に、別の視点を与えてくれたのが租税教室だった。税金とは社会全体を支える財源という漠然とした知識しかなかったが、一步踏み込んで、具体的に認識を新たにすることができた。

父の療養を支えてくれたのは病院や福祉関係の方々だが、その基盤となっていたのは、大人が納めている税金なのだという。父の場合は高額療養費や介護事業だけでなく、車椅子生活になった父を自宅に受け入れる際のリフォームにも補助してもらったと、今回初めて母から聞いた。地方公務員だった父と、教員を退職せざるを得なかった母もまた、税金を基にした制度に助けられたことも。

我が家が体験したことは特殊なケースかもしれない。しかし、今一度、広く日常の生活を見つめ直してみると、当然のように受けている社会の仕組みが、税金あつてのサービスなのだと改めて理解することができる。国税庁のホームページによると、税金は私達が健康で文化的な生活を送るために、その費用を分担し合う会費のようなものなのだという。

ところが、一部の無責任な人達が税金など納めるべきお金を未納・滞納しているというニュースを耳にすることがある。本当に生活が困窮している場合ならまだしも、身勝手な理由で社会人としての義務を果たそうとしない人達が増えているのは情けないことだ。ただ個人の権利を主張するのではなく、自分の果たすべき義務をきちんとわきまえる大人になりたいと強く思う。

今、父と過ごした日々、わけても後半の四年間に想いを馳せる時、父を亡くしたことは不運ではあったけれど不幸ではなかったのだと感じている。税金のお陰でたくさんの恩恵を享受し、さまざまな立場の方々から支えていただいた父と私達家族。この感謝の気持ちを忘れずに、いつの日か社会に貢献できる大人になれるよう努力していきたい。